

# パフォーマンスを職にする若者たちの労働事情と社会関係

## ——ウガンダの首都カンパラのカリオキ・ショー——

平成 18 年度入学  
派遣先国；ウガンダ共和国  
大門 碧

キーワード；都市文化，都市人類学，見世物，盛り場，メンバーシップ

### 対象とする問題の概要

東アフリカに位置するウガンダ共和国の首都カンパラ（人口約 120 万人）では、1970～80 年代の政治的な混乱期を乗り越えて、現在は、経済が豊かになり好景気を迎えている。しかし一方では若者の労働状況は、けっしてよいとは言えない。かつては東アフリカの「東大」のような存在であったマケレレ大学を卒業しても、収入の安定した定職につける者は多くないという現実がある。若者たちは教育レベルが重視される状況に対応して、さらなる教育を受けるために、もしくはあたらしくビジネスをはじめ資金を集めるために職を探している。

こうしたカンパラの好景気と若者の職不足を背景に、この 10 年のあいだに都市文化としてうまれて成長を遂げたのが、「カリオキ・ショー (*karioki show*)」という見世物である。これは「バーやレストランに設置されたステージ上で、音楽をかけながら、マイム（既存の楽曲にあわせて、実際の声を使わずに歌っているように口や体を動かして歌を表現するパフォーマンス）やダンスなどを 3 時間近くかけておこなう」ものである。このショーを担っているのは 10 代から 20 代の若者たちで、かれらは 10 人前後でグループ（カリオキ・グループ [*karioki group*]) を形成し、複数の盛り場をまわって、お金を稼いでいる。

### 研究の目的

本研究の目的は、アフリカの都市のひとつ、カンパラにおいて、近年に新しく生まれてきた「カリオキ・ショー」というパフォーマンスを職とする若者の労働状態を把握し、カンパラにおける労働事情に関する考察を深めることである。具体的には、このカリオキ・ショーという職業が生まれてきた背景、パフォーマーたちのライフヒストリー、そしてパフォーマーたちのショーの実践状況を明らかにし、「パフォーマンスを職業にしている」点を考慮に入れながら、この職業の問題点と可能性を分析することを目的としている。

そこで、カンパラに 50 以上存在するカリオキ・グループの中から 2 つのグループを選び出して、集中的な聞き取りと練習やショーへの参与観察をおこない、また、ほかのグループの代表者に対するイン



↑カリオキ・ショー（Pavicom Dancing Factory）

タビユーや、公演場所であるバーやレストランの経営者や従業員に対する聞き取りをおこなった。

### フィールドワークから得られた知見について

自他共に「カリオキ・ショーの父」と認めているグループは1999年に結成された。創設メンバーは、当時通っていた学校で開催されていたタレント・ショーをヒントにしてこのショーを始めた。ほかのグループは2000年以降に形成されており、形成理由には、レストランやバーのオーナーがその場所を盛り上げるため、地方の若者たちがカンパラでお金を稼ぐため、ミュージシャンとして名を売るためといった理由のほかに、ひとつのカリオキ・グループから何名かのメンバーが独立して多くの報酬を得るために新たなグループを形成している姿も観察できた。公演場所の多くが1990年代終わりから2000年初めにかけて開店したのち、低予算で人を集めることができるという利点に目をつけて、カリオキ・ショーを始めた。

↓バックステージ てんやわんや



←元旦もカリオキ・ショー 今晩は少し気合を入れる

ショーに携わる若者の多くが、カンパラ育ちであった。出身の民族は、カンパラがガンダ人の土地であるため、ガンダ人が多数派であるものの、他民族出身の人や、ガンダ人と他民族の混血である人も少なくなかった。片親がウガンダ人以外である人もいた。この職への参入理由として一番多くあげられたのは「金を稼ぐため」であったが、同時に「好きだから」という言葉もよく聞いた。また、ミュージシャンを目指して、このショーで有名になろうとしたり、演技力を磨こうとしている姿も見られた。

かれらの報酬は、グループの演技力や組織力、あるいは個人の環境や能力によって10倍近くも相違していた。さらに、予定されていたショーが突然中止されたり、交渉して決めた報酬額を当日に減額されるなど、若者の立場は弱く、安定した労働状況にあるとは言えない。また、グループのメンバーの流動性が高く、パフォーマー間の社会関係は、非常に柔軟で幅の広いものであることが推測できた。一度出ていったメンバーがもとのグループへ戻ってきたり、ショーを一緒にやっっていなくてもグループのメンバーであると認めたり、毎回違う人の組み合わせでショーをしたり、もしくは直前まで誰がくるかわからない状況でショーをつくりあげる力を考えると、若者たちは、臨機応変で融通のきく対人関係をつくっていることがわかる。

以上をまとめる。カリオキ・ショーという職は、若者の好奇心とカンパラの社会状況のもとで活性化されてきた。現在、その労働状況は不安定だが、パフォーマーたちは楽しむことを忘れず、また自分の

夢を実現させるため取り組んでいる。同時にかれらは、苦しい労働条件の中で働きやすい場を求めて流動しつつ、毎晩のショーをつくりあげる度量をもっていた。ただし、この職業における娯楽の要素と、ショーが即席で間にあわせたにつくられる性質が、かれらを不安定労働に陥らせる可能性もある。

→  
ショーの翌日の昼ごはん



↓カリオキ・ショーをしながら子育て



#### 今後の展開・反省点

今回のフィールドワークでは、カリオキ・ショーに集中した現地調査をおこなったために、カリオキ・ショーとほかの世界（ほかのエンターテインメント業界、ビジネス、学校など）とのつながりを十分には把握することができなかった。また、カンパラの若者たちが使用するガンダ語の習得がいまだ十分とは言えず、6カ月の調査では、パフォーマンスに表現されている内容の機微を理解することや、若者たちの本音を深いところで明らかにするまでには及んでいない。

そこで今後は、第一に、上述したカリオキ・ショーが形成されてゆく歴史的なプロセスと現在の公演の成立過程を詳細に記述することによって、カリオキ・ショーと若者のかかわりを都市人類学的な視点から明らかにし、博士予備論文としてまとめたい。そしてつぎには、このカリオキ・ショーを職にすることがはらんでいる問題点を、若者たちがどのように解決し、もしくは回避しているのかを、パフォーマンスの内容の詳細と、カリオキ・ショー以外に若者たちが取り組んでいる営みとのかかわりをおおして考察していきたい。



↑カリオキ・ショーをしながらはじめたレンタルDVD屋